映画「六ケ所村ラプソディー」が2006年3月に公開されてから2年が経ちました。この間わたしたちは多くの人々の協力のもとに、映画の上映活動を進めてきましたが、同時に六ケ所再処理工場稼働にむけてのさまざまな出来事を休むことなく記録し続けてきました。「六ケ所村通信no.3」から2年8ヶ月、今ここに「六ケ所村通信no.4」を完成し、皆様にお届けします。

プロデューサー　小泉修吉

心を揺さぶられずにはいられない。
みんな動いている。発信している。
自分達が持ち得る力を信じている。

—— SUGIZO（ミュージシャン）

現実が動き始める、その瞬間

「六ヶ所村通信no.4」はこれまでの4本の中でも最も激しく動き始めた現実を記録したものとなりました。
これまでシナリオのない、刻々と変化するダイナミックな現実をどう記録し伝えていくのかを考え、
映画の完成を待たずに報告という形で「六ヶ所村通信」というビデオレターを出すことにしたのは、
より早くより多くの人々に情報を提供し共有したいと思ったからです。
「核燃料サイクル計画」：使用済核燃料を再処理しプルトニウムを取り出すーは国策であり、
日本は原子力立国を宣言しました。世界はこれからのエネルギーをどうするのか揺れています。
地球温暖化をもたらした大量生産・大量消費・大量廃棄の文明の岐路に立っているのです。
六ヶ所をめぐる問題はもう一つ新たな要素を含んでいます。
私たち1人1人の生き方が未来を決めるというビジョンが
初めて現実に共有されつつある時代に問われているのは、
政府でもなく、産業でもなく、まさしく私たちのあり方と選択だということです。
そういう意味でこれまでのようなドキュメンタリー映画よりももっともっと開かれた、
現在進行形に近い市民メディアとして「六ヶ所村通信」は制作されました。

—— 監督　鎌仲ひとみ

上北郡六ヶ所村・
豊かな漁場と大自然。
人口1万1千人。

「六ケ所村通信no.4」

プロデューサー：小泉修吉
監督：鎌仲ひとみ
助監督：澤口佳代
撮影：小原信之、澤口佳代
上映配給：巌本和道、藤井佳子
製作・配給：グループ現代

2008年/DVD/カラー/
スタンダード/75分

『六ケ所村通信シリーズ』とは？

2004年4月から始まった『六ヶ所村ラプソディー』の撮影。東京と六ヶ所村との往復を繰り返しながら合計20回近く行い、200時間に及ぶ撮影素材の中から119分の映画として公開されたのが「六ケ所村ラプソディー」です。映画には納まりきらなかった様々なシーンを「六ケ所村通信no.1～no.3」でご報告させていただきましたが、今回映画公開後の取材をまとめた「六ケ所村通信no.4」を加え、「六ケ所村通信シリーズ」として皆様にお届けします。

『六ケ所村通信no.4』

＜監督：鎌仲ひとみ/制作：グループ現代/2008年/75分/カラー＞

2007年8月から2008年2月までの取材スケッチ。六ヶ所再処理工場や核燃サイクル計画の事を知った人々が増えるにつれて、さまざまなアクションが起きてきました。サーファーたちは、六ヶ所へ"WAVEMENT"というツアーをします。その旅先で様々な出会いがうまれます。上映会も全国各地で広がっていきます。「花とハーブの里」の菊川慶子さんは訪問客が増え、その対応に追われています。十和田市で無農薬のお米を作ってきた苫米地ヤス子さんはこれからもお米をつくり続けるか悩んでいました。その答を求めて自然農の実践者、川口由一さんに会いに出かけます。食糧生産地、東北の漁業者とサーファーたちが再処理反対の署名を届ける一方、電気の消費地東京では大きな集会が開かれます。それと呼応するように青森現地でも動きが・・・人々がつながり、動き始めた現実にカメラもまた動かされてゆきます。

『六ケ所村通信no.1』

＜監督：鎌仲ひとみ/制作：グループ現代/2004年/51分/カラー＞

2004年4月から8月までの取材スケッチ。青森県六ヶ所村でチューリップ祭りを開催し核施設に頼らない生活を実践する菊川さんは、ハンストを決行した八戸市の山内さんと共に、使用済み核燃料再処理工場のウラン試験を止めようと、ビラを配り歩きながら村民に反対を呼びかけていく…。

『六ケ所村通信no.2』

＜監督：鎌仲ひとみ/制作：グループ現代/2005年/58分/カラー＞

2004年夏から12月にかけての取材スケッチ。有機農業でトマトや長芋を作る荒木さんと仲間達は、ウラン試験回避を目指し隣接市町村に申し入れを行います。一方建設会社会長の岡山さんやクリーニング店社長の小笠原さんたちは、地場産業の活性化や雇用確保のため再処理工場との共存が必要だと訴えます。そしてみぞれまじりの雪の12月遂にウラン試験が…。

『六ケ所村通信no.3』

＜監督：鎌仲ひとみ/制作：グループ現代/2005年/57分/カラー＞

2004年秋の終わりから2005年早春までの取材スケッチ。農業を営みながら再処理に反対する吶さん達は、フランスの再処理工場周辺で漁業を営む地元住民を招き意見を聞きます。クリーニング店を経営する小笠原さん達は共存を目指す立場で勉強会を開催します。京大の小出先生は原子力の恐ろしさを訴えます。ウラン試験が始まる前に、吶さんや苫米地さんたちは放射能がかからない最後の野菜の直売会を開き…。